

論 文

国語科教育教材としての「山椒魚」

— 改稿から読解の可能性を探る —

Teaching Practices in the Native Japanese Language Classroom: The Reworking in *Sanshouo*

市川 絃美

Hiromi ICHIKAWA

キーワード：国語科教育、井伏鱒二、「山椒魚」

*the native Japanese language education, Masuji Ibusse, Sanshouo*

井伏鱒二「山椒魚」は、最初期の習作である「幽閉」を改稿・改題した作品であり、昭和四年五月に同人雑誌「文芸都市」に発表され、後に作品集「夜ふけと梅の花」(新潮社、昭和五年四月)に収録された。発表後も作家が手を加えたことから、「幽閉」や他のプレテクストとの相違も含め、改稿部について論じられてきたが、その中でも特に主軸となってきたのは結末部の削除問題である。

昭和六十年、「井伏鱒二百選全集」(全十二巻・補巻一卷、新潮社、昭和六十年十月〜翌六十一年十月)に収録するにあたり、作家自身によって結末部分が大幅に削除されたことで、刊行当時から今日に至るまで様々に論じられてきた。作品解釈に関わる改稿は読者も巻き込む大問題へと発展したわけである。

本稿では高校国語科教育教材として本作を扱うため、削除問題の詳細および考察に言及することは割愛する。ここで留意したいことは、結末部削除に関わる作品読解の可能性についてである。昭和二十五年頃から現在に至るまで、本作は国語科教育教材として採択されてきたが、各教科書に採録されたのは百選全集改稿以前の本文である。つまり、山椒魚と蛙とのいわゆる「和解」と呼ばれる結末で作品は閉じるのである。だが、果たしてあの結末を「和解」と言い得るのだろうか。

か。あるいは、改稿前後の二つの作品を生徒に提示することで、読解の可能性を広げることができるのではないか。学習指導要領改訂に伴い一層アクティブ・ラーニングへの取り組みが求められる昨今、本稿では「山椒魚」の結末部削除に光を当てた現代文の授業展開の一例を提示したい。

まず、いわゆる「和解」の場面について考えていく。従来の現代文Bの授業では、蛙の嘆息を発端とする結末部の場面に着目し、「和解」という解釈のもとに作品を扱ってきた。特に、山椒魚の「友情を瞳に込めてたずねた」、そして蛙の「今でもべつにおまえのことを怒ってはいないんだ。」という箇所から、両者は岩屋から出られない境遇と苦しみを共有し、かつ飢えによる死を目前にした蛙の許しによって、いがみ合いからの「和解」と捉えられてきた。

しかし、ここで着目すべきなのは、蛙が山椒魚に発した言葉そのものについてである。それは「怒ってはいない」であって、「憎んではない」でも「許している」でもないのである。先の蛙の言葉で作品が閉じられるため、この言葉の背景にある蛙の詳細な心情を捉えることはできない。従って、先の場面のみで両者の「和解」が成立したと安易に意味づけることは困難なのである。また、蛙の死

の先にあるのは、山椒魚の孤独と悲しみの日々が再び繰り返されることであることも忘れてはならない。こうした点に留意し、生徒たちに「和解」と捉えるか否かを議論させることで、読解をより深めていくことが可能となる。

次に、「ところが山椒魚よりも先に、岩のくぼみの相手は、不注意にも深い嘆息をもらってしまった。」以降の結末部削除について考える。先述したように、自選全集刊行にあたり、先の文を含む十八センテンスが削除された。これによって作品読解に関わる決定的な相違を生むこととなる。それが蛙の「死」である。

最後の十八センテンスが無くなり、山椒魚と蛙の我慢比べで作品は閉じる。削除以前、死を前にした蛙が思わず「不注意にも深い嘆息をもらってしまった」のは、次の世代へと命を繋いでいく「しきりに杉苔の花粉の散る光景」を目にしたからであった。この「生」との対比によって顕在化される「死」が削除によって消失するのである。筆者はこれによって作品性が損なわれるなどと論じたのではない。むしろこの消失によって両者の関係性がいがみ合いから変化する、更には山椒魚が絶対的な孤独と悲しみから免れ得る、こうした多様な可能性を有する結末となり得ることを指摘したのである。山椒魚が「悪党」と化したのは、「寒いほど独りぼっち」で「悲嘆にくれて」いたからであった。蛙は被害者であると同時に、「際限もなく広がった深淵」から山椒魚を救う唯一の光でもあるのである。

講義形式の授業を基盤とした上で、二つの結末について生徒自ら考え、そして議論する。結末部の有無によって如何に読解の可能性が開かれるか。山椒魚と蛙の関係性を丹念に読み解きつつ、二つの結末を生徒に提示することでこうした議論の場を提供することができるのである。

附記 「山椒魚」本文の引用は、東京書籍平成二十九年度版『新編現代文B』に拠る。